

北米ミシシッピ文化の比較考古学的基礎研究

菊池 徹夫・佐藤 宏之・高橋龍三郎

はじめに

私たちは、このところ比較考古学の手法を探りつつ、主として日本列島における縄文文化を中心に「社会の複雑化」のプロセスについて考えようと心がけてきた。

そのために、肝心の縄文文化じたいについての研究はもちろんだが、従来から縄文文化の実体解明のためよく引き合いに出されることの多かった北アメリカ北西海岸インディアン諸部族について、じっさいに、基礎的な民族考古学的調査研究を試みることにした。

二〇〇三年八月には、初めてバンクーバーからプリンス・ルパート、シトカ、そしてアンカレッジにわたる総延長二

〇〇〇kmの海岸線を空路で拠点移動しつつ、その文化と社会について概観する機会を得た。また、翌二〇〇四年夏には、特にハイダ族の故郷ともいべきクイーン・シャーロット諸島を訪れ、各地で彼らの民族考古学的知見に触れることができた。これら兩年の調査については、それぞれ本誌一五〇冊および一五三冊で簡潔な報告を行っている。

そこで昨二〇〇五年夏、ひとまず北西海岸を離れ、北米中南部ミシシッピ川流域を訪れることにした。というのも、ミシシッピ文化をはじめ、この流域一帯に分布する一連のマウンド文化が、いわゆる「マウンドビルダー論争」などに見るように、いわゆるアメリカ的考古学の形成に大きな位置を占めているだけでなく、北西海岸と同様ふるくから縄文時代、とくに後晩期の文化や社会の理解の上で比較の

対象として言及されてきたにもかかわらず、そのわりには、井川史子氏、佐々木憲一氏らによるものを除いて、日本ではあまり紹介されてこなかったからである。紙数も限られているので、以下、要点のみごくかいつまんで記述する。

I 踏査の行程

私たち、菊池徹夫、高橋龍三郎および佐藤宏之は二〇〇五年八月一日(月)に成田を出発し、デトロイト経由でシンシナティ、三日にはデトロイトを経てセントルイス、五日にメンフィス、七日にバーミングハムを訪ね、これら各都市に所在する遺跡を踏査し、そして九日にはバーミングハムからデトロイトへ戻り、そこから高橋と佐藤は成田へ帰国し、菊池はサンフランシスコへ飛んだ。

さて、こうした空路によるあわただしい移動によって、ようやくこの短時日の間に何とか四カ所の遺跡を訪れることができた。すなわち、二日にまずオハイオ州グレイト・サーペント・マウンド (Great Serpent Mound)、四日にイリノイ州カホキア・マウンズ (Cahokia Mounds State Historic Site)、六日にはテネシー州ピンソン・マウンズ (Pinson Mounds State Park)、そして八日にはアラバマ州マウンドヴィル (Moundvill Archaeological Park) で

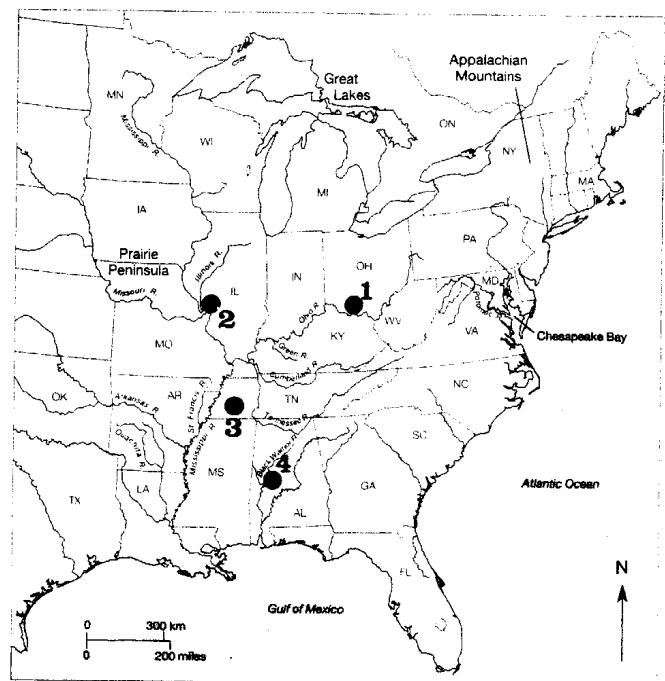


図1 遺跡の位置

- 1 Great Serpent Mound
- 2 Cahokia Mounds
- 3 Pinson Mounds
- 4 Moundvill

ある(図1)。とにかくアメリカ大陸の広大さを実感する旅ではあった。

II ミシシッピ文化の概要

ミシシッピ川は北米大陸のほぼ中央部を、イリノイ川、オハイオ川など多くの支流を合わせつつ北部から南部へと貫流する。最大の支流ミズーリ川の源からの全長は約六二〇〇kmあり、世界第三の大河である。河口の街ニューオーリンズからメキシコ湾に注ぐ。

最初に流域に移住したフランス人達は一七世紀末に流域をルイジアナと名付け、一八世紀前半に河口にニューオーリンズを造ったが、一九世紀初頭、全流域が米国領となった。当然ながら、この間、今日に至るまで一貫して水運、河川交通、発電、灌漑など内陸の大動脈であり続けた。

ところで、大河ミシシッピの全流域面積は約三二五万平方kmにおよぶが、この広大な流域にAD一〇世紀から一五世紀前後にかけて花開いたのが、いわゆるミシシッピ文化である。

カホキアやマウンドヴィルに代表されるこの文化は、トウモロコシを主食とする食糧生産経済に依存し、新大陸ではメキシコ以北で最も大規模な人口と、発達した首長制階層社会とをもつ先史文化として知られている。

頂部を平坦にした盛土の方形マウンド群が中央広場を取り巻くように築かれた、いわゆる祭祀センターの存在が顕著であり、これらの拠点的な大規模遺跡とともに、一ないし数基のマウンドからなる小規模マウンド群、複数の住居からなる集落遺跡、一〜二軒の住居 (Household) で構成される農場 (Farmstead) 遺跡など、大小の規模の遺跡群がひとつの居住形態システムをなして地域に展開し、さらにこれらの遺跡に象徴される社会単位が階層化した社会政治組織とリンクして、拠点的祭祀センター (都市) を中

心としたいくつかの地域的政治組織 (Polite) に統合されていたと考えられている。

このような首長制的社会組織だけではなく、装飾品や威信材に見られる図像などから窺える精神生活や、この社会全体を支えたトウモロコシと豆という栽培植物等から見て、ミシシッピ文化への、メソアメリカの文化・社会政治的影響は強いと考えられる。

もっとも、これら両地域の文化的相互関係は、ミシシッピ文化期に始まるわけではなく、前段階のウッドランド期にすでに接触関係として認められる。例えばこの時期に属するピンソン・マウンド遺跡では、後述のように、中央広場を取り囲むマウンド群が展開しており、出土した各種の遠距離交易品や埋葬法等からも、すでにメソアメリカとの密接な相互交流関係が窺える。

このように、間断なくメソアメリカの影響は受けつつも、ミシシッピ文化がウッドランド文化を直接の基層文化として発達したこともまた明らかである。ウッドランド期には、すでに農耕も開始されていたが、いまだ季節的移住を伴う園耕 (horticulture) 段階にあったと推定されており、本格的な定住農耕社会が始まるのは、やはりミシシッピ文化段階からと考えられる。

III 各遺跡の概観

一・グレイト・サーペント・マウンド (図2)

オハイオ州シンシナティ市街から東南東へ約一〇〇km、ブラッシュ・クリーク (Brush creek) に望む丘陵上の平坦部にある。全体がくねくねとうねる細長い蛇の形をしていて、全長四〇五・三八m、平均の高さ約九〇cmである。いわゆる象形墳 (effigy mounds) の中でも最も印象的で有名なものの一つといえよう。



図2 グレイト・サーペント・マウンド

一九世紀後半、ハーヴァード大学のプットナム (W. Putnam) が、近くの二つの墳墓 (円墳) とともに発掘し、これらを同時期のものとした。その後、これらはアデナ (Adena) 文化 (八〇〇BC ~ AD一〇〇) に

属するものと考えられてきたが、最近、サーペント・マウンド出土の木炭によるC¹⁴年代測定の結果、付近にあるもう一つの墳墓や「蛇の尾」の近くにある集落跡と同じフォート・エンシェント (Fort Ancient) 文化 (AD一〇〇〇 ~ 一五五〇) のものであるという。その形状の特異性もあって、古くから有名な割には、正確な所属年代はもとより、築造目的などにも謎の多い遺構である。

二・カホキア・マウンズ (図3)

ミズーリ州東部セント・ルイスの東方、イリノイ州との州境をなすミシシッピ川を渡って一〇数kmにある。Northern American Bottom と呼ばれるここミシシッピ川の豊かな沖積層低地に分布する大小のマウンド遺跡群の中で最大の規模を誇るばかりでなく、ここにはメキシコ以北では最も高度に発達し「太陽の都」と呼ばれる強大な地域社会が栄えていた。一九八二年に世界文化遺産に登録されている。

八世紀ごろのウッドランド期から人々の居住は始まっていたと思われるが、AD一〇〇〇 ~ 一四〇〇年の間、ミシシッピ文化が繁栄を誇っていた。とくに一一 ~ 一三世紀の頃をピークに人口は一万人に達し、周辺のミシシッピ文化の集落を統合するような政治・宗教の地域的センターであっ

た。

八六ヘクタールもの面積の土地が、延長三kmにわたり木柱の柵でぐるりと取り囲まれ、中心には中央広場 (Central Plaza) があり、広場を囲むように大小二〇ものマウンドがある。広場の北側には、平面長方形で高さ約三〇・五mという北米最大のマウンド、モンクス・マウンド (Monk's Mound) がある。発掘の結果、最上部のテラスには神殿ないし宮殿と思われる巨大な建物が立っていたようである。

広場の北・東および西側には大小一〇〇以上ものマウンドが点在する。モンクス・マウンドの西方には木柱を一定

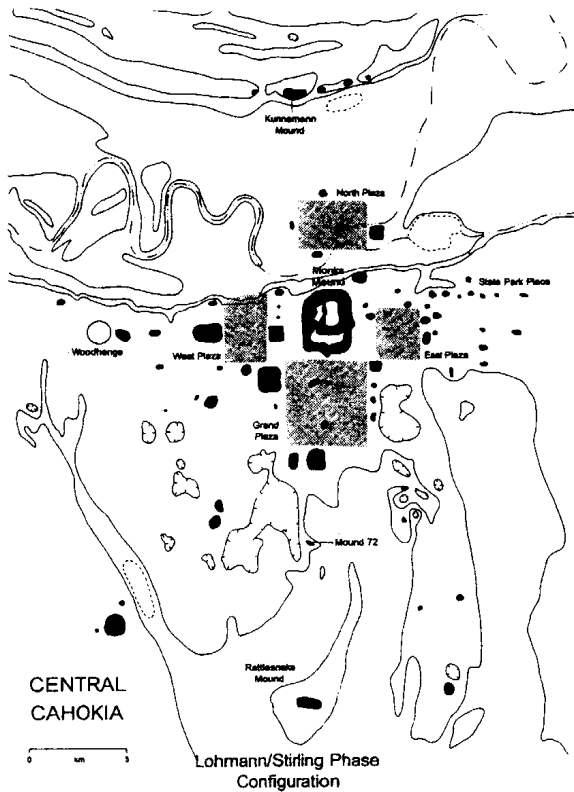


図3 カホキア・マウンズ

北米ミシシッピ文化の比較考古学的基礎研究

間隔で環状に立て並べたウッド・ヘンジ (Woodhenge, Wood circle) がある。

マウンドは墓としても使われている。墓の被葬者は、威信材としての貝製ビーズ、貝製容器、真珠、銅製品などの副葬品によって階層差が認められる。中には殉葬ないし犠牲と思われる数十体の埋葬例もある。

この大集落も、人口圧や疫病の流行で一四〇〇年頃から人口は減り始め、一五〇〇年には集落もほぼ放棄された。一六〇〇年代には後のカホキア・インディアンがこの地域に來住した。現在の遺跡名は彼らの部族名に由来する。

三. ピンソン・マウンズ (図4)

テネシー州メンフィスの東北東約一二〇km、ジャクソンの南にある。一八二〇年にヨーロッパ人としては初めてジョエル・ピンソンによって発見され、この名がつけられた。現在、遺跡の大部分は州立公園として保護されている。

中期ウッドランド期の、この地域における太陽暦や灌漑の水にかかわる季節的祭祀行為を伴う宗教センターであった。

フォークトディア川の南側の支流の第一段丘沿いに立地する四八五ヘクタールほどの遺跡には、一七基以上のマウンド、環状土盛、広大な居住・生活区域、その他の遺構が

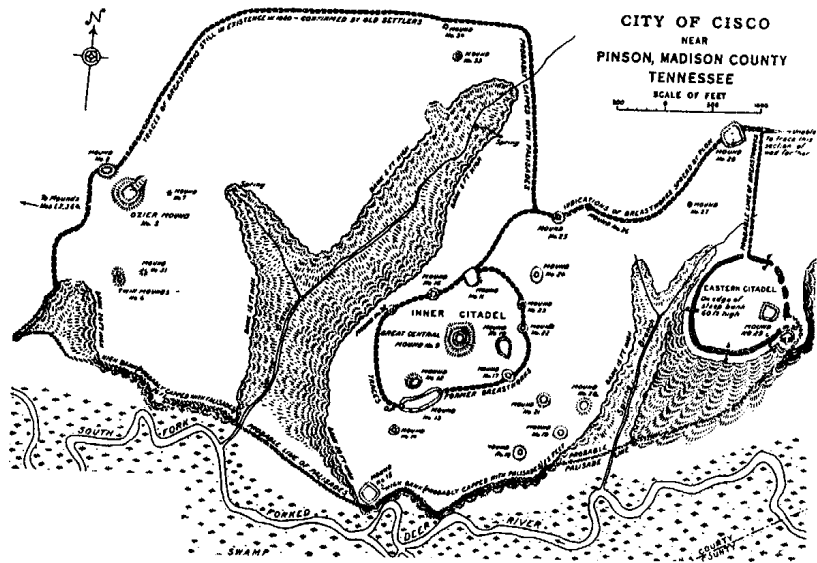


図4 ピンソン・マウンズ

ある。

ソウルズ・マウンズ (Sauls Mound) は、

高さ約二二m、平面四隅はほぼ主方位を指す。カホキアのモルクス・マウンドに次いで、北米のこの種のマウンドでは第二位の規模である。

トゥイン・マウンズやマウン

ド三一の丸木で覆われた墓の成人の被葬者のうち何人かは、副葬品として、銅製の耳飾り、雲母製の鏡、片岩製のペンダント、淡水産真珠、貝製ビーズそれに人間の頭蓋骨片で作ったガラガラといった他地域からの移入品を含む多くのものをもっている。ピンソン地域におけるエリートだったのであろう。

BC五〇年ごろにマウンドの造営は始まり、一般的な村

落から特殊な宗教センターに成長し、AD三世紀初めに全盛期があった。衰退の原因は不明である。

四. マウンドヴィル (図5)

アラバマ州バーミングハムの南西約九〇kmにあるトゥカルーサの町から約二〇km南に位置する。現在、州立考古学公園となっている。ブラック・ウォリア川を北に望む河岸段丘上にある、ミシシッピ文化の大集落である。

遺跡の輪郭は不整形で、およそ一〇〇ヘクタール以上あり、川に面する以外の三方は木柵で固められていた。カホキアに次ぐ規模と複雑性をもつ、政治・宗教センターであった。柵の内側には約三二ヘクタールの中央広場を取り囲むように、大小二〇基以上の、頂部が平坦な四角錐形のマウンドがある。土盛りの高さは一〜八mと様々である。そのうち大型のものは有力者の居館、宗教的建築(神殿)、その他の公共施設の基壇で、小型のものは埋葬などの目的に使われたと思われる。

最大のマウンドのうちマウンドAは中央広場の真ん中にあり、マウンドBは遺跡の中軸線上北側にある。後者は急峻なピラミッド型で、高さ一七・六七mもある。調査の結果、マウンドの他、たくさんのピット、公共の建物、住居跡、墓などがあり、住居跡は七五、埋葬跡は三〇〇も発

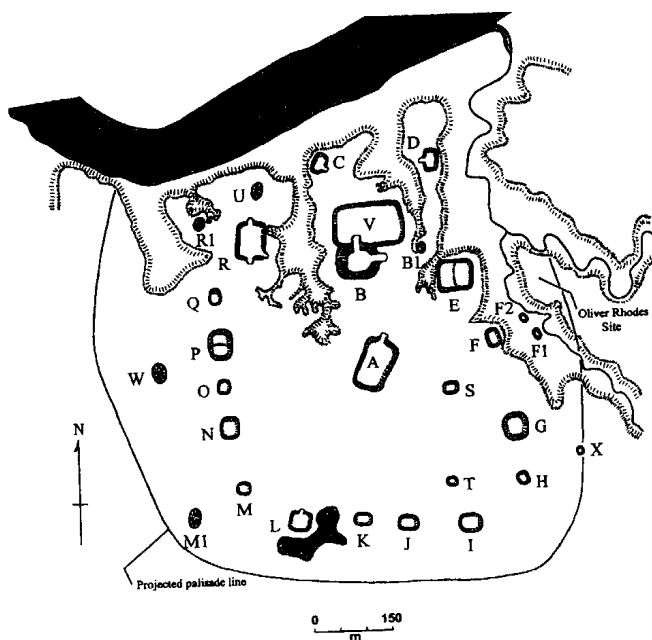


図5 マウンドウィル

見られてい
る。
今世紀初
頭にこれら
のマウンド
を発掘した
ムーア (C.
B. Moore)
によれば、
かつて一六
世紀にこの
地を訪れた

われるが、彼らは、ブラック・ウォリア川流域の氾濫原の農地や、より小さなマウンド・センターから供給される食糧や労働の貢納によって支えられていた。

マウンドウィルの周囲半径二五kmの範囲には、マウンドを一つだけもつ同時期の集落が一〇箇所確認されている。これらは、マウンドウィルのチーフの統制のもとにあり、それぞれの地域の中心集落であって、さらにそれらの周りには、マウンドをもたない多数のムラがあったと考えられている。他のミシシッピ人の社会と同様、マウンドウィルの成長と繁栄もトウモロコシ (maize, Indian corn) の集約的農耕によって可能だった。

貴族階級は、銅、雲母、方鉛鉱それに海の貝といった奢侈品を入手するための交易権を握っていた。

マウンドウィルの住民は高度に洗練された技術による工芸品を産み出し、土器や石製品、打ち出し文で飾られた銅などで彼らの芸術的優秀性は明らかである。なかでも、これまでに出土した完形の土器は一〇〇〇個体以上、土器片は二〇万点以上に上っている。

この遺跡では、一八六〇年代以来現代まで連続として学術調査が続けられているが、マウンドウィルの成立と終焉、その実態については未だ不明な点も多い。

近年ではミシガン大学のピーブルズ (Ch. S. Peebles)

スペイン人デ・ソト (Hernando de Soto) は、チーフはマウンド上に居を構え、一般民衆はそれを取り囲む平地に居住していた旨記録している。

確かに、支配階級と庶民の間には著しい身分差があったらしく、マウンドに葬られる者からそれ以外の共同墓地に葬られる者まで、また、副葬品も銅斧や真珠のビーズをもつ者から副葬品をもたない者まで様々で、この社会の顕著な階層化を示している。この文化の社会を首長国 (chiefdom) と呼ぶ所以である。

マウンドウィルは最も多い時で人口一千人を数えたと思

らによる調査があり、またステポナイティス (Steponaitis 1983) は、ウエストレンジェファーンソン期 (AD 900 ~ 1050) マウンドヴィルI期 (1050 ~ 1250) 同II期 (1250 ~ 1400) 同III期 (1400 ~ 1550) 同IV期 (1550 ~ 1650) という時期区分を試みている。

ウエストレンジェファーンソン期には未だ小規模なムラであったが、マウンドヴィルI期前葉には、ここを含め、小さいマウンドが一基だけのセンターが少数形成され、近接地区の人口も増大して社会の階層化が始まり、I期後葉からII期にかけて、AD 1200年頃にはマウンドヴィルにのみ少なくとも五基のマウンドが築かれ始め、中央広場の公共施設が造られ、木柵が建てられたりし、社会は三階層に分化するという。かくてII期後半はマウンドヴィルが他に超越した地位を獲得していった時期である。こうした一連の変化の背景には、狩猟・漁労・採集経済からトウモロコシ栽培を基軸とする食糧生産経済への変換がある。しかしながら、同III期にはマウンドヴィルに変化が生じたらしい。この遺跡は儀式的、政治的諸機能はなお保持しながらも町邑としての外貌は失いつつあった。同IV期には、いくつかのマウンドが廃絶され、外部に対しての宗教的重要性を失うことにより衰退は確実なものとなる。貴族階級に優越性

をもたらしていた様々な物資の移入も減少した。一五〇〇年代までには、遺跡のわずかな部分のみが住まわれるのみで、地区の大部分は廃絶された。一五四〇年代までに最初のヨーロッパ人は北米南東部に到達するが、マウンドヴィルの住民と歴史上ネイティヴ・アメリカンの部族となった人々との間の人種的、言語的關係は未だ明確にはなっていない。

(菊池徹夫)

IV ミシシッピ文化の経済と生業

一・農耕

ミシシッピ文化の生業の基盤はトウモロコシ農耕にあったが、この農耕は原則として、ミシシッピ川およびその支流の広大な河谷に広がる氾濫原の自然条件を利用して行われた。アメリカン・ボトムと形容されるミシシッピ川中流域では、周囲の台地から明瞭に区画される幅の広い河谷中の沖積低地に網状流路が形成されている。河谷内には、砂丘や低地、湿地、三日月湖等が広がり、大小の集落は高地に、農耕地は低地に設けられた。低地は春になると増水や洪水等により水位が上昇し、夏から秋にかけて徐々に低下する。この定期的な自然現象(洪水等による土壌更新、水の補給等)を利用した比較的粗放な農耕が行われたと考

えられている。従って本格的かつ組織だった集約的な大規模農耕ではなく、トウモロコシ以外にも、豆・カボチャ・ヒマワリ・ヒヨウタン・タバコ等が単一の耕作地で同時に混栽された。

二・動植物資源

栽培・農耕とそれに基盤を置いた遺跡群は、河谷部に展開していたため、河谷外に隣接する森林地帯や高原・草原地帯は、動植物・鉱物・石材等の各種の有用な自然資源の獲得領域として機能していた。イヌ以外の家畜を持たないミシシッピ文化の人々にとって、特に動物タンパクの獲得は、野生魚鳥獣類に頼らざるを得なかった。

春になると各種の河川遡上性魚類が獲得可能となる。同時に春の氾濫・増水によって各所の池や水場にもたらされた魚類は捕獲が容易であり、夏季までの間、天然の「養殖池」代わりとなった。興味深いことに、アラバマ州マウンドヴィル遺跡では、マウンドを作るためにできた土取穴が養殖池として利用されたことが、動物遺存体分析から明らかにされている。各種の水鳥も、漁撈同様居住地付近の沼沢で獲得が可能であった。特に渡りをするガン・カモ類は、春と秋の渡りのピーク時に狩猟されていた。

しかしながら、動物食資源として重要であったのは、な

んと言ってもオジロジカであった。遺跡出土の動物骨の九〇パーセント以上をオジロジカが占めることもまれではない (Welch 1991)。オジロジカは代表的な森林棲なので、ミシシッピ文化の狩猟具が、前時期までの石槍 (Projectile Points) 主体から石鏃主体に一斉に変化するごとく無関係ではあるまい。他の動物としては、アナグマ・七面鳥・オポッサム・ウサギ・リス等も狩猟されたが、オジロジカよりは重要ではなかったらしい。これらの鳥獣は、秋から冬にかけて台地上の森林地帯で主に狩猟された。

トウモロコシ農耕が本格的に発達する以前にも、河谷地帯では、ウリ科・アカザ・タデ・キク科等の数種の野生植物が食用に供されていた。出土人骨の安定同位体分析によれば、トウモロコシが急速に重要性を増すのはAD九〇〇〜一〇〇〇年頃であるらしい。このことは、人骨形態の分析からも追認されている。この時期の成人女性人骨の上腕には、しばしば長期間に及ぶ加重的な筋肉労働の痕跡が観察されるが、これはおそらく長時間にわたってトウモロコシを磨り潰す処理加工の過程が反映されたためと推定されている。

周囲の森林地帯からは、堅果類や各種のベリー・果実等が採集された。これらの野生植物は、主に秋に収穫・採集され、冬越しのために貯蔵された。

三、物質文化

ミシシッピ文化の代表的な拠点の祭祀センターであったイリノイ州カホキア遺跡(八〇〇〜一四〇〇年、最盛期は一〇〇〇〜一三〇〇年)やマウンドヴィル遺跡(九〇〇〜一五五〇年、最盛期は一三〇〇年前後)は、人口一〇〇〇人以上、最盛期には数万人規模にもふくれあがったと推定される定住「都市」であった。これらの巨大集落では、首長\サブ・チーフ(リネージ・リーダー)\専門家\平民といった社会階層に分化しており、特に専門家層は、土掘り・伐採用の農具の刃先である石器や儀礼用に装飾された土器等の道具、ゴージット(のど当て)・タブレット・人形・耳栓・パイプ等の工芸品(儀礼用具)・奢侈品・威信材等を専門的に生産し供給したと考えられている。

生業用の道具の組成は、定住型狩猟採集民のそれと基本的に変わりがないが、その生産にはきわめて高度な製作技術が発揮されている。新大陸の先史文化一般と同様、金属器の製錬技術が未発達のため、その分石器製作技術の水準はきわめて高い。

打製の土掘り農具(石斧)であるHoëは、入念な被熱処理によって非常に薄手で均質な規格品が量産されており、規格化が進んでいる伐採・木工用の磨製石斧Cotah同様、専門的な大量生産によったらしい。Cotahは農地拡大に伴

う伐採用具として、Hoëは起耕用の農具として重要であった。花粉分析によって、AD一〇〇〇年頃を境に、森林の焼き払いによる農耕地の拡大が行われた痕跡が確認されている。

丸鑿状の手斧Adzeもミシシッピ文化期から顕著に増加しており、木工や建築・カヌー資材の調達・加工等の作業が活発化したことが示唆される。河谷地帯に展開したミシシッピ文化の各集落間の交通や、生業活動域への移動手段として、カヌーが専ら利用された。釣り針・縫い針・削器・ピン等の骨角器もよく見られ、特にシカの尺骨製の錐は、ミシシッピ文化に特有の道具であった。

重要な狩猟具の変化としては、前述したように小型三角形石鏃の出現が挙げられる。本格的な定住生活の出現と軌を一にし、森林環境での弓矢猟が本格化したためと考えられる。

生業用の道具ではないが、祭祀センターのような拠点の遺跡からは、Chunkeyと呼ばれる窪みのある磨製の石製円盤がよく出土している。これはクリケットに似たゲームに使用される用具で、同種のゲームが中央アメリカでも行われていた。

土器は、以前から製作されていたが、ミシシッピ文化の土器は、貝粉を胎土の混和剤に使用することで知られてい

る。ミシシッピ文化の考古学的同定には、この土器の共通性がメルクマールとされている。貯蔵ないし調理用の壺、水瓶、平鍋、食物用の鉢が主要な器種となっている。文様は、縄の叩き目や刻線を組み合わせて用いることが多く、刺突文や浮文を施す例もある。北米先住民諸文化と同様、バスケット類もよく用いられた。

ウッドランド期の住居は凹形が基本であったが、ミシシッピ文化になると方形を基本とするように変化した。住居は、方形に切り回した溝の上にトウ製の編み垣で壁を作っている。編み垣の上に粘土を塗り重ねる場合もある。支柱は中央一箇所だけであることが多い。その大きさから五〜一〇人程度の収容力と考えられ、核家族ないし大家族程度が居住したらしい。「農耕遺跡」から大規模集落まで、一般の住居はこの規模の住居から基本的に構成されているため、核家族ないし大家族がミシシッピ期の基本的な社会単位と考えられている。

四. 遠距離交易品

発達した首長国のミシシッピ文化では、多くの奢侈品や威信財が生産された。それらの素材として、かなり遠方から特殊な産物が交易により獲得されており、加工された精緻な工芸品のみならず未加工の遠距離の産物自体が威信財

としての意味を有していた。その代表的な交易品として、自然銅・雲母・メキシコ湾産貝類・赤鉄鉱石等がある。これらの遠距離交易品は、ミシシッピ文化全体でよく共通している。

金属の精錬技術をもたないアメリカ大陸の先史人にとっては、金属自体がきわめて高い威信財となる。特に自然銅は、産出量が少なく産地も限られており、北アメリカ先住民社会全体で古くから貴重視されてきた(佐藤二〇〇五)。ウッドランド期から自然銅の交易は始まり、ミシシッピ期に発達した。自然銅自体でも十分威信財としての効果は達成されたと考えられるが、鍛造により儀礼的なピンや斧状製品等に加工する場合もあった。

チャートや良質の頁岩・石英・黒曜石等は、土掘り具(Shovel)や各種の石製利器の素材として遠距離からもたらされているが、雲母(Mica)は道具の素材とはなりえず、ビーズ等の装飾品の素材として交易された。このような装飾品の材料としては、南方のメキシコ湾産貝類もよく利用された。これらの垂飾品の穿孔用具として、多量の石英製石錐が発見されている。儀礼用のパイプの素材として、凍石も遠くから運ばれていた。

赤鉄鉱石(hematite)や方鉛鉱(galena)は、顔料として輸入されている。他には、塩や装飾品用のサメの歯等

も、交易によってもたらされていた。

五・ミシシッピ文化の経済基盤

ミシシッピ文化の生業の基盤はトウモロコシ農耕にあったが、集約的農業に発達することがなかったこの文化では、自然資源の狩猟採集も同時に大きな意味をもった。その意味では、階層化の進んだ高度の定住型狩猟採集民の文化であったとも評することができよう。ミシシッピ文化の崩壊は、白人との First Contact 以前の A D 一四五〇年頃突如として起こったと考えられており、その原因として小寒冷期 (Little Ice Age) 到来説や伝染病蔓延説等が提起されているが、いずれにせよ、ミシシッピ文化の経済基盤が自然資源の獲得・利用に大きく依存していたため、その影響が甚大であったことを意味していると思われる。

(佐藤宏之)

V ミシシッピ社会の構造

一・首長国 (Chieftom) とは

ミシシッピ文化の社会について述べる前に、本論のキーワードとなる首長国について簡単に述べておこう。

首長国という概念は、一九五〇年代から六〇年代にかけ

て、社会進化論を構築する中で生み出された概念である。サーピスは社会が統合される原理に基づいて、バンド組織・部族組織を経て、やがて国家に到る社会進化の途中に首長国 (chieftom) を位置付けた (Service 1962)。フリードも平等社会から国家にいたる社会進化の階梯の間に、位階社会 (rank society)、階級社会 (class society) を位置付けたが、位階社会を二つに分けて考えた。階層化を伴わない位階社会と、階層化を伴う位階社会である。首長国はこのうち階層化を伴う位階社会に対応する。

それらの大きな概念は、社会の複雑化と大規模な人口、それを支える経済的基盤の拡大、個人間・集団間における不平等、親族組織に基づく行政組織、神聖な首長による富と食料資源の再分配、半専門者による生業の専門化などが上げられている。

首長の主な職務は行政、経済、宗教的分野での統率である。これらの概念は、サーリンズやゴールドマンによるポリネシアなどで実施した、首長制社会に関する民族誌調査が大きく貢献した (Sahlins 1958, Goldman 1955)。生態的な要因と経済的生産性、生産経済のあり方と親族構造、首長国における親族構造と家系の系譜的關係、余剰と政治的経済の充実、再分配等が重要視された。

考古学でもこれらの成果を導入して、レンフリーは首

長国社会における再分配制度と労働力の大量動員によって、先史社会でも大規模な造成工事が可能であることについて証明した (Renfrew 1973)。

この過程で、経済的重要性を以て語られた首長による再分配は、その後の研究で、首長国と余り関係しないことがいわれ始めた。一九七〇年から八〇年代にかけての民族誌調査と理論的研究によって、首長制、首長国のあり方が注目され、多くの視点から分析が試みられた。ピーブルスとクスは、サービス等によって定義された首長国の定義の内、再分配についてハワイの首長国の民族誌を検討したところ、再分配の前提となる環境的適地における專業化の痕跡はなく、むしろ前提を覆すような自給的経済が発達したことを論証した。生産者から一旦吸い上げられた数々の生産物が、首長を通じて逆方向に再分配されると言う事実はなく、首長を通じて分配されるのは贅沢品とか、エリート層に対する貢納だけだという結論を得た。贅沢品は威信財として、首長の手で下位の首長や家臣に与えられたり、同盟国の首長等に付与されるのである。ピーブルスとクスは、再分配が首長国の中心的な概念には成り得ないし世界的な現象でもないこと、またそれを生み出す原因にも成らないこと、また首長国とは関連しないことを述べて、従来の概念に再検討を迫った (Peebles and Kus 1977)。

これらを受けて、近年の首長国に関する議論は、例えばハワイの事例を分析したアールがいうように、首長国では再分配は大きな意味を持たないこと、それに代わって威信財を巡る交易や、遠距離間交易、貢納経済、親族関係と家系、労働力や生産性の統制、婚姻、祭祀関係などが重要な特徴であるという (Earle 1977)。最近ではアールやヘイデン、ブラムフィール、カーチなどが、首長の性格論や統制の技術、神聖さやイデオロギーに関わる問題、権力が保持される集団の原理、首長が生み出される過程について研究を進めている。

このように、再分配の重要性に関する当初の視点は、多くの研究者に支持されなくなっている。この種の社会では、大抵の共同体は経済的に自給的である。特に生業上の生産に関しては、広範な産物や他の物品を取り立てて、それを再分配する代わりに、貢納物の調達や奢侈品を数少ないエリートたちに、その支持に対して賜う僅かばかりの再分配こそが、首長国の政治的経済の重要な特徴である (Earle 1977, Peble and Kus 1977, Steponaitis 1978, Welch 1991)。これらの新しい見方によると、首長は彼ら自身の野心を燃やすために貢納物を取りたてて、それらは彼らの威信や権力の維持と拡張に使われ、決して社会のために使われるのではない。生業上の物資の再分配はほとんど稀なことだ、

厳しい社会的ストレスの時にだけ見られるに過ぎないのである。

二. ミシシッピ社会における首長の階層化構造

ミシシッピ川流域は、沖積低地平野の豊かな実りに支えられ、各地に首長国が鼎立した。それらは独立した経済基盤を持ち、力関係に応じて隣接地域間で同盟関係や従属などの支配関係が結ばれた。カホキアやマウンドヴィルなどの中枢的な首長国には、配下に従属させた大小の首長国から定期的な貢納や必要物資が届けられたと考えられる。それと引き換えに首長からは威信財などが在地首長に分配され、認知と保護が約束されたと考えられる。それらの大首長国 (paramount chiefdom) では、行政上、宗教上のエリート層が発達し、判断 (Decision making) の階層が複数に分かれて行われた。すなわち下位の首長から、その上に位置づけられる上位首長、さらにそれらを統括する大首長など、三層から四層に階層化されていたと考えられる。それと逆に地域的な首長国では、階層化が弱く、二層構造のものが存在したと考えられる。一般に首長国の規模が大きくなり、巻き込まれる組織や集団の数が多く、処理する情報量が多くなり、大きな調停機能が必要な場合には階層化が進展すると考えられる。

エリート間の競争も激しく、中心的な首長国内で、あるいは地域の首長国内におけるエリート間の競争関係も激しかった。それは、首長国の基本的性格であるが、首長の側近として重要な判断に加わるエリート層は、基本的に首長に近い家系に位置し、それ自身が首長の座に君臨する資格を有するだけでなく、首長国を支える数多くの家系群との関係を持つ立場を有利に活用することができるからである。

三. 墓から見た社会の階層性

首長国は基本的に親族組織を基本として成立する政治的構造である。地域の最も勢力のあるクランのリーダーが首長の座を勤める。そして首長との血縁、家系的近親関係に基づいて個人間の序列化が行われ、政治的、宗教的エリートとして政権に加わる。首長国とは政体内における階層的秩序により、まずエリート層と一般層との区分より成立している。

マウンドヴィルでは、三〇〇〇体以上の埋蔵遺体が発見されている。それらはマウンド内に埋葬される社会的エリート層から、マウンドとはかけ離れた場所に埋葬される個人まで、幅広いコンテクストで埋葬された。階層や性別、成人か否かなどの個人的属性によって埋葬される場所、副葬品が明確に区分されている。その内容についてピーブルス

とクスの分析 (Pebbles and Kus 1977) から見てみよう。

マウンドヴィルの埋葬は、大凡次のような規制に基づいて行われている。男女の区分と、男であっても成人か子供の別、子供であっても児童か幼児の別などの細かな区分原理と階層身分差により大きく三つの区分が抽出され、最小一のクラスター区分がおこなわれた(図6)。マウンドヴィルの埋葬には、高位ランクに位置するエリート層および高位ランク者と、低位ランク者からなる。高位ランク者

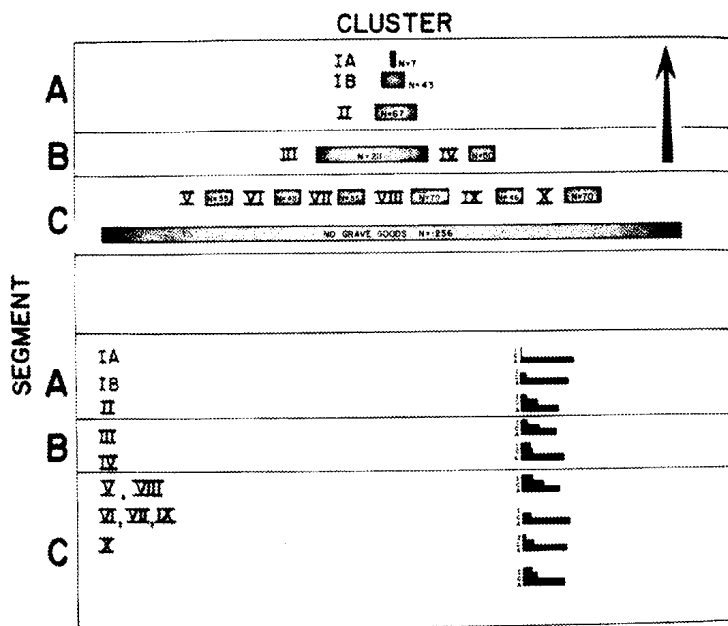


図6 マウンドヴィルの埋葬に関するセグメント分析のクラスター

にはしばしば幼児の骨が副葬される。支配者階層の埋葬は、一般民衆の墓とは離れた場所に営まれ、副葬品も異なる。図6のA区分がそれに相当するが、この埋葬は全て男性に限られ、I

A、IBクラスターはほぼ成人に限られる。埋葬区分のヒエラルヒーの頂点に位置するIAはエリート層(首長階層)に属する成人男性と目され、すべてマウンドに埋葬され、銅斧、銅で被覆した貝ビーズが副葬された。葬祭に際しては子供の骨格が伴う。この下に位置するIBは、子供と成人男性が該当する。多くはマウンドに埋葬され、銅製の耳栓、石壁、鉞物(赤・白顔料)、歯垂飾、銅製矩形の「のど当」が副葬される。支配層の最後は、あらゆる年齢の男女から成るIIクラスターで、マウンド近くの墓域およびピラザの墓に埋葬される。副葬品は矩形の銅製のど当、貝製ビーズ、方鉛鉱結晶などである。

従属階層であるB、C区分は、副葬品を伴わない大多数の墓に加えて八クラスターに細別される。クラスターIVとIIIの一部を除き、すべてのクラスターは墓に副葬される土器の種類に基づいて区分される。クラスターIII(B区分)は動物形土器(ビーバー、コウモリ、蛙、魚、アヒル等)、貝製のど当、儀礼用石製斧によって特徴つけられる。動物形土器は男女成人の墓に伴うが、儀礼用の石製斧は成人男性に限られる。貝製のど当は成人と幼児以外の子供に伴う。児童と幼児には玩具風の土器、粘土製玩具、未加工の淡水性貝殻が共伴する。未加工の動物骨は成人にだけ共伴する。B区分の第二の構成員であるクラスターIVでは、全ての

年齢の男女が含まれる。このクラスターは石製尖頭器、円盤、骨錐が伴う。B区分の大多数の埋葬は、マウンドとプラザ近くの墓域から発見される。

C区分に属する複数のクラスターは同じ程度の副葬である。これらの埋葬は、水瓶、碗、甕などの土器の組み合わせからなる。無文、有文の水瓶を持つものには幼児や児童は含まれない(VI、VII、IXクラスター)。無文碗を副葬するのは幼児と児童である。Xクラスターは副葬品として大型の土器片を共伴するが、大人のほうが子供よりも多い。最後に何の副葬品も持たない大多数の全年齢の男女がいる。C区分の人々は、マウンドやプラザ村から離れたところに埋葬される。

このようにマウンドヴィルの埋葬は、ステータスと社会的役割に応じて規定されている。マウンドヴィル社会が階層制に基づいていることがわかる。エリート層の居住区は村人の居住地より広く複雑である。またエリート層の居住地では、高位の埋葬から発見されたと同じ品々の破片が発見される。

四. 威信財経済について

先に述べたように、首長国の経済として主要な構成要素である威信財経済について見てみよう。

ミシシッピ文化の生業経済を研究するウェルチは、遺跡から出土する植物遺体のうち、メイズとドングリ、ヒッコリーの実の数量分析を行い、その相対的比率から議論を展開した。ホワイト遺跡(White site)のような中核地域を離れた遺跡では、メイズが低比率で出土し、逆に中核地域では、メイズの出土が多いことから、一度センターに生産物を吸い上げて、再度下位にむけて再分配した形跡としては不自然な点を指摘し、生業経済においては、むしろ自給的なあり方が一般的であると推定した(Welch 1991, 1996)。その点で、先に述べた民族誌からの理論的研究の成果を支持している。一方で、貝製装身具や緑石の石斧、雲母製品などは、製品と製作途中の残滓がマウンドヴィルにしか発見されず、他の外縁部の遺跡からは検出されないことから、威信財に関する生産と分配が、マウンドヴィルに一極集中していたことを指摘している。これらの議論は、首長国には再分配システムが一般的で、経済運営上不可欠であると言う一九五〇年代以来の見方を修正するもので、首長国社会とは、一般層からエリート層に対する貢納の他に、エリート間で行われる威信財の生産と配布を最高位首長が管理するシステムであるとする近年の議論に弾みをつけている。

ウェルチの研究で注目されるのは、マウンドヴィル文化における特殊な土器がマウンドヴィル遺跡内で専業者によっ

て生産されたこと、またそれらがエリート層を支える支持者達に見返りとして与えられたと推定したことである。

ペレグリンは、支持者の支援に対して与えられるシンボリックな威信財のあり方は、トンガの首長国にみられる威信財のあり方に近いと述べている (Peregrine 1999)。トンガでは有力リネージに基礎を置く首長が、威信財のもつステータス表示と地位向上の役割を統制することによって、自らの地位を維持し昂揚させている。エリートはそれらの幾つかを、支持者達が与える経済的、政治的支援への返礼として与えるのである。トンガ例を参考にすれば、マウンドヴィルのエリート層は、威信財を巡って外部との交易に深く関与し、またその交換物の生産に関わったと見るべきであろう。結局それは、威信財を必要とする諸儀礼やシンボルシステムを創出し、維持することである (Peregrine 1999)。マウンドヴィル政体では首長は威信財による体制を支えるために、外部との交易や、エリートへの威信財の分配を通じて地位の強化と維持に務め、そこで得られた威信財を下層に位置する人々に分与する事によって、忠誠と支持を得ることが出来たのである。

ポーケタットによると、カホキアでは当初、首長は物惜しみしない寛容さと工芸専門家の支援を通じてその権威を合法化した。しかし、威信財を介した外部との同盟関係

を構築することによりそれを堅固にし、また遠隔地の人々、場所、技術、行動、時には神などの秘儀的知識を通じて権威を強化していたという (Pauketat 1994)。

マウンドヴィル政体の政治権力は威信財の統制能力に基礎を置き、リネージ構造によって権威づけられていた (Anderson 1994, Knight 1990, Peregrine 1992, Welch 1991)。それだけでなく、外部との同盟関係や超自然的な力を通じて権力を維持していた (Pauketat 1994)。マウンドヴィル政体はトンガに似ている (Peregrine 1999)。トンガと同じように、マウンドヴィルの居住組織が示す所では、政体には首長間のヒエラルヒーがあり、マウンドヴィルの大センターには傑出した首長が君臨し、小センターや外部の集落には下位の首長が位置付けられた (Peoples and Kus 1977, Steponaitis 1978)。政治的ヒエラルヒーは丁度リネージのように組織化されたらしい (Knight 1990)。

五. マウンドヴィルのマウンド配列

マウンドヴィルに配列されたマウンドは、大小合わせて二九基ある。それらは矩形のプラザを囲んで、その四辺に直線的に並んでいる。これに囲まれたプラザの中央に、A丘と呼ばれる当遺跡最大のマウンドがある。カホキアと同

様に、個別のマウンドはそれが所属するクランを示し、規模の違いはエリート間の勢力や力関係、継続の長さなどの差異を示すと考えられる。したがって、規模の大きな首長国、すなわち複雑な階層性をもつパラマウント首長国ほど多くのマウンド、したがって多くのクランが序列化され、政治的に構造化されることになる。

しかし、この考えとは異なり、マウンドの遺構配列に何らかの規則性と、イデオロギーが作用したと考えるナイトはマウンドの配置の設計原理を説明しようとする。

ナイトはマウンドの配列がイデオロギーの図式的な表現であって、そこに社会的区分が反映していると考ええる(Night 1998)。彼の分析によると、マウンド配置には次のような特徴があるという(図7)。

- ① A丘とB丘を結ぶ南北軸によって、マウンドの配列全体が西側と東側の左右対称に分かれる。
- ② 西側と東側の配列は双分的であり、両者は鏡に映したように重なる。
- ③ 大型のマウンドと小型のマウンドがあり、大型はエリートの居住施設、小型は埋葬を含む先祖を祀る寺院施設である。
- ④ 大型マウンドと小型マウンドは交互に直線上に現れる。
- ⑤ 東側のマウンド配列では、時計回りに大型と小型のマ

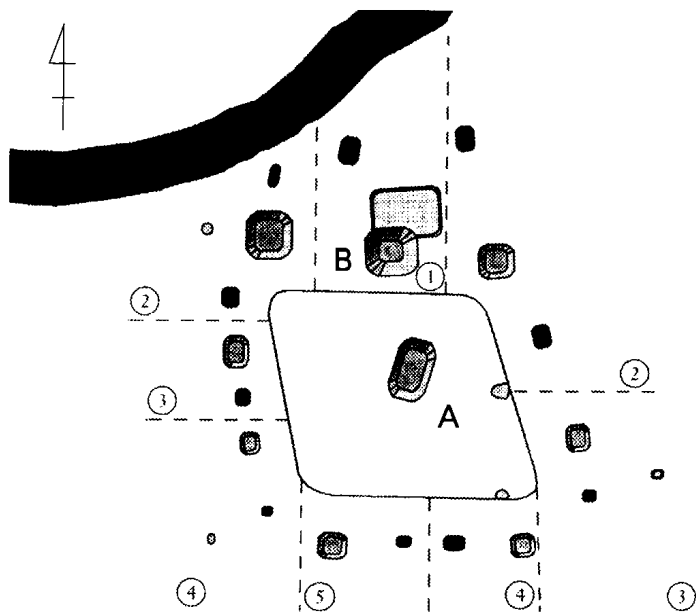


図7 マウンド建築空間の社会的分割の様式

ウインドが交互に並び、西側では反時計回りにめぐる。

- ⑥ 東西で左右対称性をもつが、南北においては大型マウンドが北側に集中し、北側と南側では非対称で顕著な対極性をもつ。

これらの特徴からナイトは大型マウンド(エリートの居住施設)と小型マウンド(埋葬施設)が機能を異にした一組の対であると考えた。それぞれの対が全体をめぐる配置こそがある社会集団の構成原理に基づくものであると主張

した。そこで彼が設計原理と看做したのは、チカソー族のクランなどに見られる親族構造の階層性である。

ナイトは、二〇世紀初頭のチカソー族の民族誌に見られるフィールドキャンプ

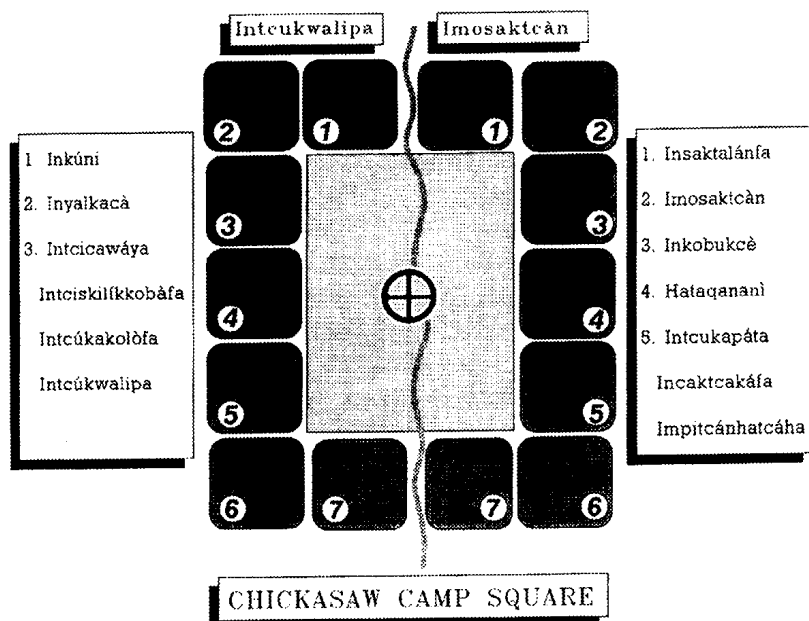


図8 チカソー族インディアンのキャンプ配置模式

階層性に基づき、東側と西側においてそれぞれランク順にしたがって居住が配列されるのである。しかも、東側の群では時計回りに、西側では反時計回りに序列化されるのである。そしてそれらの居住

などの二分割制と居住の階層システムとの顕著な類似に注目した。そこでは、団結的なサブクランが、一時的なフィールドキャンプを営む時に、矩形の広場を囲むように、二つの原理に従って居住施設が構成されている(図8)。一つはチカソー族の二分割組織(dual organization)に基づいて、キャンプの南北軸を挟んで両集団が東西の対称的配置に居住地を定め、もう一つの原理としてサブクラン間の

施設に囲まれた広場の中央に、集団のシンボルである「議会の火」(council fire)が設置される(図8)。中央の「議会の火」は集団の構成原理上、大変重要な意味を持つといわれるが、マウンドヴィルのA丘の位置はこれをシンボル化したものと考えられるのである。

このように、ナイトはチカソー族のフィールドキャンプにおける居住地の設計原理が、マウンドヴィルのマウンド配置と酷似した内容であると考え、マウンド配列は当時の社会秩序の具体的反映であり、まさに社会の縮図であると考えたのである。しかし、チカソー族の民族誌とマウンドヴィルが造営された時期との間におおよそ七〇〇年近いギャップがあり、しかも民族的な同定の問題も伴うので、この説にはまだ多くの不確定部分がある。

五. ミシシッピ文化の社会構造

ミシシッピ文化の社会構造を考古学データだけで復元することは難しい。そこで、白人との接触期に残された古記録が重要な意味をもつ。それによると、スペイン人の征服によって急速に内陸部土着社会の階層的組織は衰えたものの、ある地域においては強い階層化社会が存続していた。世襲的首長と特権的貴族が一般人と分離して存在していたことが窺われる。接触当時、土盛りのマウンドや寺院、

エリート層の家屋などが、政治―儀礼的センターであることが知られていた。

デ・ソトやデ・パレハ (de Pareja) が残した古記録から、最高首長の衣装、寺院の内容、政治的競争、戦争にいたるまでを知ることができる (Swanton 1932)。しかし、さすがに親族組織やその政治的関与など、社会構造に関する細部までは記録されていない。そこで民族誌を復元する必要が生じる。

一八世紀のアメリカ東南部の民族誌には、平等的なクラン組織 (egalitarian clan system) と、二分割組織 (dual organization) が描かれている。ナチェス族やティムカ族、アパラチー族などの社会によく見られる特徴であった。多くの研究者はこれを接触期以後の新たな適応と考えており、ミシシッピ文化の社会とは関係がないとみなしていた。

しかし、ナイトは平等クラン内部に見られる二分割組織こそ、伝統的組織形態の残影と考えた。そこにはヒエラルヒー的な構造を宿す「優位意識」(Superiority) が顕著に見られること、また内部において平等的であっても外部に對しては外婚を通じて明らかな優位意識があり、それがミシシッピ文化の「ヒエラルヒー的クランシステム」と関係していると解釈した (Knight 1990)。これに従えば、ミシシッピ文化は階層化の顕著な首長国で、内部の階層化が

進展し、貴族層と一般層の間の隔絶、首長間のヒエラルヒーが確立したものと捉えられる。やがてそれは崩壊して、しかもスペイン人の征服下で大きな変容を遂げて、一八世紀の民族誌に逢着するというシナリオである。

ナイトが批判的に検討したのは、「平等クラン組織」(egalitarian clan organization) が社会進化の上で、「行き止まり」と考えられて来た点である。クラン全体の利益のためなら、成員に完全な従属を課して、確固たる協力の労働編成を敷くものの、絶対的な平等主義であるために、社会進化はそれ以上に発達することはなく、したがって、当地域の平等クランからは発展した首長国は生まれにくいと考えられた。かといって北西海岸に見られる内婚的母系出自システムやサーリンズの説くポリネシアのラメージンシステムもない (Sahlins 1958)。

ナイトが着目したもう一つの特徴は、二分割組織 (dual organization) である。社会全体が二つの対象的区分に分けられ、あるクラン群は一方に、他のクラン群は他方に分割される。どちらの側も、正反対の特性を持つことになっており、片側が戦争という特徴を持つならば、もう一方は平和という特性を持つ。その分割が外婚的な婚姻集団をなすこともある。その意味では半族である。

二分割組織のもう一つの特性は、ヒエラルヒーに関する

明確な認識を有する点である。一方は他方に対して「優位」であると信じられる。最も平等主義だと言われる社会にそれが見られるのは注目される。ランキングは半族を構成するクラン群に置き換えられ、明確な序列として位置付けられる。互いに顕著な反対性を認識しているので、例えば一方が戦争で他方が平和というように、一方が優位で他方が劣位というような概念がチカソー族等の中で、特別な慣習や生活、マナーなどの点にも拡大していた。これは平等社会ではなく、逆にカーストの精神である。

問題は、オマハ族やマスコギー族、イロコイ族のような北米東部社会において見出される社会組織が、君主的で世襲的な首長を伴う社会的不平等を理論的に持ちうるかという点である。これについては確固たる答えがある。米国北東部のミシシッピ文化の首長国ではこれが起こった。これを支持する民族誌が東南部アメリカ、特にミシシッピ文化の後裔達の中に残存している。北部フロリダのタイムカ族は主要な例で、階層的クランタイプ (Ranked clan type) の社会組織に基づき階層的社会を構築した。一八世紀のナチェス族の社会システムは、北米東部に共通した社会組織の広域なパターンと緊密に関係している。南東部のチカソー族とマスコギー族の社会組織は、プレーリー地域のオマハ族、ある種のシオウ族の一部、イロコイ族と共

通したタイプを有している。それは二分割組織でヒエラルヒーを伴う単系の外婚集団であり、この背景は二つの世襲的な単系外婚集団の二分割で、その一方が優位性をもつと考えられ、公的な宗教的行事や社会生活において互いに補完し合う一方で、ある程度の敵愾心と競争意識がその関係に内在するのである。半族はナチェス族、ユチ族、マスコギー族、チョクトー族の間では本来の意義が失われてしまっただが、階層化した二分割制とは別の形態がその機能を補完していた。民族誌データをみると、社会階層化は、今まで述べたように、平等クランの中に組み込まれ、そして調和していたことが知られるのである (Knight 1990)。

七. 首長・貴族の出自の辿り方

古記録によると最高首長の血縁者や貴族に帰せられる高貴な地位には二つの異なった序列の辿り方がある。そのシステムはナチェス族にみる、男系の出自に基づき、首長の子供と孫たちに与えられた特権と同様なものである。

ナイトの復元 (Knight 1990) によれば、タイムカ族の貴族制は母系を辿り、最高首長を頂点として、王統からの家系的距離に基づいて貴族の中に四、五のランクと役割が用意されていたらしい。また男系に基づき、最高首長を頂点として家系的距離によって辿るもう一つの貴族地位の系

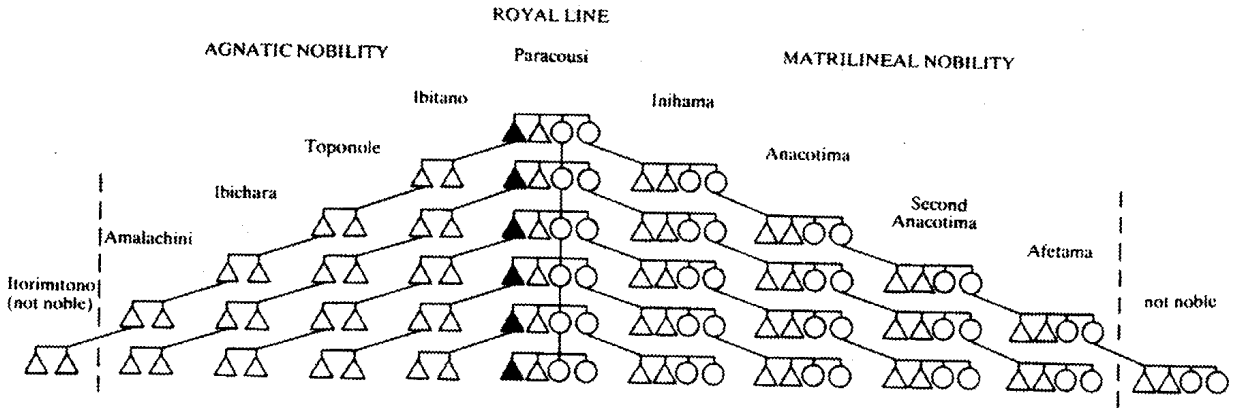


図9 貴族の称号の継承に関する母系・父系のあり方

列が用意されていたという。母系で継承される最高首長と貴族の地位とランクは王統からの家系的距離がものをいう。家系が分節化し傍系の程度を増すごとに低位貴族のランクしか与えられず、それも分岐して四家系を経るまでである。王統から離れること五番の傍系になると、もはや貴族に列せられることはない。

ナイトの復元では、男系で辿られる貴族の地位があるという。これは男系クランに与えられた貴族の地位を示す呼称が実際に古記録にあるので、間違いないところであろう。また前首長の男系子孫に対して与えられた特別な貴族の地位があることも判明している。男

系の系列を用意するのは、外婚的母系親族集団に基礎をおく階層化社会では、最高首長の子供たちは、そのままでは母方の平民の地位に甘んじることになるので、それを救うためにきわめて優れた機能を果たしたとナイトは考えている。この継承方式は、首長の子供たちに貴族の地位を与える特別の措置であると考えられる。しかし、男系の継承において、その地位が男女の両方に付与されたかは問題で、ナイトは男の子孫にのみ与えられたと考える (Knight 1990)。

これを図式化すると図9のようになる。この図式によると、首長と貴族の地位は母系に限定されるのではなく、数は少ないが男系を辿る系譜でも貴族の地位を与えられることになっている。男系では、首長の大多数の子孫は母方クランの平民の地位に落ちることになるが、そのような平民クランの中にも首長の係累につながる貴族がいることになり、これは親族集団の団結を高め、首長制をより堅固に治めるには好都合な方式である。

八、ミシシッピ文化の首長国の脆弱制

上でみたように、首長国は内部に多くの課題を抱えており、政体としてはかなり脆弱な部分がある。実際、ミシシッピ文化に属する各地の首長国を時期的に俯瞰すると、二〇

○年以上も永続する遺跡は少なく、一〇〇年未満で崩壊している例が多い。遺跡の終末期には、マウンドが構築されず、また利用もされない事が多く、しかも近接する集落遺跡の様相から急激な人口の減少があったと目される場合が多い。人口と共に遺跡そのものが衰退してしまつた例の他に、他所に引越したと考えられる例もある。オコニー地方ではオコニー川の支流に存在したシヨルダーボーン遺跡が一四五〇年頃没落すると同時に、上流のスカル・シヨールズ遺跡が勃興する現象が観察され、両者間に人口移動を含めた何らかの転位があったことが予想されている。これらは旱魃による生態系の破壊に伴う社会の崩壊、人口増加に伴う食料事情の悪化、政体間の競争にともなう首長国の興亡、威信財経済の崩壊にともなう首長国の崩壊などの所説が提唱されている。このうちオコニー地方の首長国の消長を検討したM・ウィリアムとG・シャピロは、政体間の競合的な関係にその理由を求めた (William and Shapiro 1996)。

サバンナ川流域各地における首長国の成立と発展、崩壊について研究したアンダーソンは、首長国の生成・発展と崩壊という側面が、決して一回的で回帰直線的なものではなく、途中で単純な首長国に逆戻りしたり、再び復活するような循環的なあり方について注目し、それを首長国の循

環行動 (cycling behavior) と呼んだ (Anderson 1994)。彼が研究したサバンナ川流域では、AD一〇〇〇年から一四五〇年頃までに複合化した首長国を築くが、一四五〇年頃を境に急激な崩壊をみせる。それ以後、再び単純な首長国を構築することになるという。これらの興隆を流域各地において精細に検討してみると、代わって他所に主体的なセンターが出現したり、またそれが衰退したり、同様な軌跡を描くことから、一センターのみの興亡だけで首長国の性格を描くことは困難であると指摘している。これと同じ現象が、カホキアやマウンドヴィル、クーサなどの拠点センターにおいても同等に惹起する点から、彼はそれを首長国社会に典型的に見られる構造的特徴であるとみなす。首長国の興亡に関して、単に自然環境の悪化や食料生産量の減少に直結して考えるのではなく、首長国が成立する背景としての周辺地域とのバランス関係など、またそれを維持する貢納経済や威信財のあり方の変化などを分析する必要を強調した。

九. 戦争について

従来からミシシッピ文化における戦争の原因について、生態学的見地から説明することが多かったが、近年ではそれに加えて、社会的要因や威信などの側面から説明するこ

とが目立つようになった。

首長国の急激な版図の拡大と地域間の勢力の交替の背景には、頻繁な戦争が存したことを考えるべきである。また強力な首長国として、周辺の首長国に圧力を加え、従属と朝貢関係を構築するには、力関係に訴える場合もある。武器がウッドランド期の石槍からミシシッピ期の弓と石鏃に変革する背景に、狩猟活動だけでなく頻繁な戦闘を考慮すべきかもしれない。この戦争が、どのような方向性をもつ戦争であったかは、十分に解明されていない。奴隷獲得の戦争は北西海岸の諸部族によく見られたが、ミシシッピ文化についてこれまで余り主張されることはなかった。奴隷獲得もひとつの要因であろう。巨大なマウンドや記念物、宗教施設等の造成に必要な労働力は、単に版図内の従属国から強制的に動員するだけで不十分であろう。スターリング期のカホキア人口が、最大に見積もって一〇〇〇〇〇〜三八〇〇〇人に達したというフォウラーの主張 (Fowler 1974) が正しいのなら、その急激な人口増加の背景に、武力による統合と強制的移住などを考えるべきである。

戦争が頻繁に起こることも首長国社会の大きな特徴である。これは、いわば付き物といってよいほど、大きな特徴である。デ・ソトの記録には、当時頻繁に集団間で戦闘行為が行われたことが記録されている。時には、デ・ソトの

軍隊に同盟関係を持ちかけ、隣の首長国を攻めようという大胆なものもあったという (Peebles and Kus 1977)。それほど、首長国間には敵意と復讐が満ち溢れているからこそ、威信財などを配布して同盟関係を構築するのである。

(高橋龍三郎)

付記

この調査・研究は、菊池は早稲田大学比較考古学研究所の、高橋は同じく先史考古学研究所の活動の一環として行った。また、この調査の遂行にあたって、菊池は、主に文部科学省科学研究費補助金 (研究代表者・菊池徹夫、基盤研究 B (2)、課題番号 14310190) に拠った。佐藤は、文部科学省科学研究費補助金 (研究代表者・佐藤宏之、基盤研究 B (2)、課題番号 17320121) を受けた。また高橋は、学術フロンティア事業研究費、早稲田大学特定課題研究費 (課題番号: 2005B-046) の助成を受けた。本稿は、当然それらによる成果の一部である。記して感謝する。

挿図出典

- 図 1 遺跡の位置 (Milner 2004: Fig. 2 より作成)
- 図 2 グレイト・サーペンント・マウンド (Milner 2004: Fig. 56 による)

- 図3 カホキア・マウンズ (Chappell 2002: Fig. 42 以下参照)
- 図4 ジンソン・マウンズ (Norton 2001: Fig. 1 以下参照)
- 図5 マウンドビル (Knight and Steponaitis 1998: Fig. 1. 1. 以下参照)
- 図6 マウンドビルの埋葬に関するセグメント分析のクラスター (Peebles and Kus 1977: Fig. 3 以下参照)
- 図7 マウンド建築空間の社会的分割の様式 (Knight 1998: Fig. 3.4. 以下参照)
- 図8 チカンー族インディアンのキャンプ配置模式 (Knight 1998: Fig. 3.5. 以下参照)
- 図9 貴族の称号の継承に関する母系・父系のあり方 (Knight 1990: Fig. 1 以下参照)

引用参考文献

- 佐藤宏之 二〇〇五 「クマ送り儀礼に見る社会的威信と階層化社会―北太平洋北岸狩猟採集民社会の比較民族考古学―」
 岡内三眞・菊池徹夫編『社会考古学の試み』一九三―二〇四頁、同成社
- 高橋龍二郎 二〇〇一 「総論」『村落と社会の考古学』現代の考古学十六、朝倉書店
- Anderson, D. G. 1994 *The Savannah River Chiefdoms: Political change in the late prehistoric Southeast*, The University of Alabama Press.
- Chappell, S. A. K. 2002 *Cahokia: Mirror of the Cosmos*. The University of Chicago Press.

北米ミンシッピ文化の比較考古学的基础研究

- Dinceau, D. D. and R. J. Hasenstab 1995 Explaining the Iroquois: Tribalization on a Prehistoric Periphery, in T. C. Champion (ed.), *Centre and Periphery: Comparative Studies in Archaeology*, Unwin Hyman. pp. 67-87.
- Earle, T. K. 1977 A Reappraisal of Redistribution: Complex Hawaiian Chiefdoms, in T. K. Earle and J. E. Ericson (eds.), *Exchange System in Prehistory*, Academic Press.
- Fowler, M. 1974 *Cahokia Ancient Capital of the Midwest*, Addison-Wesley Modules in Anthropology 48.
- Goldman, I 1955 Status Rivalry and Cultural Evolution in Polynesia, in *American Anthropologist* Vol. 57, No. 4, pp. 680-697.
- Jeske, J. J. 1999 World-Systems Theory, Core-Periphery Interactions, and Elite Economic Exchange in Mississippian Societies, in P. N. Kardulias (ed.), *World-Systems Theory in Practice*, Rowman and Littlefield Publishers, Inc., pp. 203-221.
- Knight, V. J. 1990 Social Organization and the Evolution of hierarchy in Southeastern chiefdom, *Journal of Anthropological Research* Vol. 46, pp. 1-23.
- Knight, V. J. and V. P. Steponaitis 1998 A New History of Moundville. in V. J. Knight and V. P. Steponaitis (eds.), *Archaeology of the Moundville Chiefdom*, Smithsonian Institution Press, pp. 1-48.
- Knight, V. J. 1998 Moundville as a Diagrammatic

- Ceremonial Center, in V. J. Knight and V. P. Steponaitis (eds.), *Archaeology of the Moundville Chiefdom*, Smithsonian Institute Press, pp. 44-62.
- Milner, J. R. 1996 Development and Dissolution of Mississippian Society in the American Bottom, Illinois, in J. F. Scarry (ed.), *Political Structure and Change in the Prehistoric Southeastern United States*, University Press of Florida, pp. 27-52.
- Milner, G. R. 2004 *The Moundbuilders: Ancient Peoples of Eastern North America*. Thames and Hudson.
- Norton, Mark R. 2001 The Pinson Mounds Complex. *West Tennessee Historical Society Papers*. Vol. 55.
- Pauketat, T. R. 1994 *The Ascend of Chiefs: Cahokia and Mississippian Politics in Native North America*. The University of Alabama Press.
- Peebles, C. S. and S. M. Kus 1977 Some Archaeological Correlates of Ranked Societies, in *American Antiquity* Vol.42. No.3, pp. 421-448.
- Peregrine, P.N 1991 Prehistoric Chiefdoms on the America Midcontinent: A World-System Based on Prestige Goods, in C. Chase-Dunn and T. D. Hall (eds.), *Core and Periphery Relations in Precapitalist Worlds*. Westview Press.
- Peregrine, P. N. 1999 Legitimation Crises in Prehistoric Worlds, in P. N. Kardulias (ed.), *World-Systems Theory in Practice*, Rowman and Littlefield Publishers, Inc., pp. 50-
- 52.
- Renfrew, C. 1973 *Before Civilization: The Radiocarbon Revolution and Prehistoric Europe*.
- Sahlins, M. 1958 *Social Stratification in Polynesia*. American Ethnological Society. University of Washington Press.
- Service, E. R. 1962 *Primitive Social Organization: An Evolutionary Perspective*, Random House.
- Smith, B. D. 1996 Agricultural Chiefdoms of the Eastern Woodlands. in *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*, Vol. 1, North America, Part 1, pp. 267-323.
- Steponaitis, V. S. 1978 Location Theory and Complex Chiefdoms: A Mississippian Example, in B. D. Smith (ed.), *Mississippian Settlement Patterns*, Academic Press.
- Swanton, J. R. 1932 Ethnological Value of the De Soto Narratives. *American Anthropologist* Vol. 34, No. 4, pp. 570-590.
- Welch, P. D. 1991 *Moundville's Economy*. The University of Alabama Press.
- Welch, P. D. 1996 Control over Goods and the Political Stability of the Moundville Chiefdom, in J. F. Scarry (ed.), *Political Structure and Change in the Prehistoric Southeastern United States*, University Press of Florida, pp. 69-91.
- William, M. and G. Shapiro 1996 *Mississippian Political*

Dynamics in the Oconee Valley, Georgia, in J. F. Scarry
(ed.), *Political Structure and Change in the Prehistoric
Southeastern United States*, University Press of Florida.
pp. 128-149.